

# 西鶴一代女

—— 映画文学人生論

原作：井原西鶴 「好色一代女」 (1686年)  
監督：溝口健二(1952年) 参考：新藤兼人「ある映画監督  
出演：お春 田中絹代 の生涯 溝口健二の記録」(1975)  
出演：勝之介 三船俊郎 脚本：依田義賢  
笹屋嘉兵衛 新藤英太郎 撮影：平野好美  
扇屋弥吉 宇野重吉 音楽監督：水谷浩

これはシナリオではありませんね。  
ストーリーです。

溝口健二監督の映画は退屈するほどではないにしても、深く感動したことはない。

井原西鶴の『好色一代女』を原作とする『西鶴一代女』は昭和二十七年にヴェネツィア国際映画祭サンマルコ銀獅子賞を受賞。続いて、上田秋成原作の『雨月物語』、森鷗外原作の『山椒大夫』と三年連続で同賞を受賞、さらに、『近松物語』で芸術選奨とブルーリボン賞監督賞を受賞した。

これだけ国際的にも評価の高い名作を続けて観せられても私はあまり感動しなかった。

夏目漱石原作『虞美人草』と大岡昇平原作『武蔵野夫人』の映画は比較的面白いと思ったが、この二作は溝口健二監督の作品の中では失敗作という評価になっている。私の映画鑑賞力に問題があるのかもしれない。

『虞美人草』と『武蔵野夫人』は映画を観る前に原作を読み、予備知識があつたのに対して、西鶴や近松の古文には親しんでいなかった。江戸時代の町民にとっては西鶴の浮世草子や近松の人形浄瑠璃は日常的な娯楽だったはずだが、今は古典芸術だ。

あらためて古典芸術を学び直す必要があるが、それは後まわしにして、とりあえず、新藤兼人監督のドキュメンタリー映画『ある映画監督の生涯 溝口健二の記録』を観た。

# 西鶴一代女

映画文学人生論



新藤がかけだしの頃、脚本を溝口に見せると、「これはシナリオではありませんね。ストーリーです」と言われたという。筋を追うだけのストーリーではダメだという意味らしいが、『西鶴一代女』や『近松物語』にしても観客が惹きつけられるのはストーリーの面白さではないだろうか。

新藤兼人は発奮してシナリオの勉強をし、シナリオライター兼監督として大成した。シナリオは発端、葛藤、終結の三段階で構成されるという。それだけではシナリオの書き方はわからない。

わかったのは映画をつくる作者がシナリオライターではなく、監督だという事実だ。溝口健二は自分ではシナリオを書かず、シナリオライターを徹底的にしごいた。昭和十一年、依田義賢に書かせた『浪華悲歌』と『祇園の姉妹』は日本映画に始めてリアリズムが生まれた名作と批評家に絶賛されているという。

そんな映画監督にも意のままにならないことがある。『西鶴一代女』撮影中に溝口が「僕は田中君に惚れているんですがね。なんとかありませんかね」と新藤に相談した。新藤が後日、田中絹代にその点を確認すると、田中は「芸術、芸術、そりゃ、けっこうですよ。ユーモアがございませんでしょう、先生は」と答えた。そんな話が面白いと思う人には映画観賞力は期待できない。

芸術の秋の夕暮蚯蚓鳴く